

# 二人の役人

宮沢賢治

青空文庫



その頃の風穂の野はらは、ほんとうに立派でした。

青い萱や光る茨やけむりのような穂を出す草で一ぱい、それにあちこちには栗の木やはんの木の小さな林もありました。

野原は今れんべいは練兵場いじょうや粟の畑あわはたけや苗圃なえぼたけなどになつてそれでも騎兵きへいの馬が光つたり、白いシャツの人が働いたり、汽車で通つてもなかなか奇麗きれいですけれども、前はまだまだ立派でした。

九月になると私わたくしどもは毎日野原に出掛でかけました。殊ことに私は藤原慶次郎ふじわら けいじろうといつしよに出て行きました。町の方の子供こどもらが出て来るのは日曜日かぎに限かぎっていましたから私どもはどんな日でも初はつた草けや栗くりをたくさんとりました。ずいぶん遠くまでも行つたので

したが日曜には一層遠くまで出掛けました。

ところが、九月の末のある日曜でしたが、朝早く私が慶次郎をさそつていつものように野原の入口にかかりましたら、一本の白い立札たてふだがみちばたの栗の木の前に出ていました。私どもはもう尋常じんじょう 五年生でしたからすらすら読みました。

「本日は東北長官とうほくちようかん 一行の出游しゆつゆう につきこれより中には入るべからず。東北庁ちよう」

私はがっかりしてしまいました。慶次郎も顔を赤くして何べんも読み直なおしていました。

「困こまったねえ、えらい人が来るんだよ。叱しかられるといけないからもう帰ろうか。」私が云いいましたら慶次郎は少し怒おこつて答えまし

た。

「構かまうもんか、入ろう、入ろう。ここは天子さんのところでそんな警部けいぶや何かのどこじやないんだい。ずうつと奥おくへ行こうよ。」

私もにわかおもしろに面白おもしろくなりました。

「おい、東北長ちようかん官くわんというものを見たいな。どんな顔だろう。」

「鬚ひげもめがねもあるのさ。先頃さきごろ来た大臣だいじんだつてそうだ。」

「どこかにかくれて見てようか。」

「見てよう。寺林てらばやしのところはどうだい。」

寺林てらばやしというのれんべいは今は練兵場れんべいじようの北のはじになっていますが野

原のの中でいちばん奇麗きれいな所ところでした。はんのきの林がぐるつと輪わに

なつていて中にはみじかいやわらかな草がいちめん生はえてまるで

一つの公園地のようでした。

私どもはそのはんのきの中にかくれていようと思つたのです。  
わたくし

「そうしよう。早く行かないと見つかるぜ。」

「さあ走つてこう。」

私どもはそこでまるで一目散いちもくさんにその野原の一本みちを走りま  
した。あんまり苦くるしくて息いきがつけなくなるととまつて空を向むいて  
あるきまたうしろを見てはかけ出し、走つて走つてとうとう寺林  
についたのです。そこでみちからはなれてはんのきの中にかくれ  
ました。けれども虫がしんしん鳴き時々鳥が百足びきも一かたまりに  
なつてぎあと通るばかり、一向人いっこうも来ないようでしたからだん  
だん私たちは恐こわくなくなつてはんのきの下の萱かやをがさがさわけて

初<sup>はつ</sup>茸<sup>たけ</sup>をさがしはじめました。いつものようにたくさん見<sup>み</sup>附<sup>つ</sup>かりましたから私はいつか長官のことも忘<sup>わす</sup>れてしきりにとつておりま  
した。

すると俄<sup>にわ</sup>かに慶<sup>けい</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>が私のところにやって来てしがみつきました。まるで私の耳のそばでそつと云<sup>い</sup>ったのです。

「来たよ、来たよ。とうとう来たよ。そらね。」

私は萱<sup>かや</sup>の間からすかすようにして私どもの来た方を見ました。  
向<sup>むこ</sup>うから二人の役<sup>やく</sup>人<sup>にん</sup>が大<sup>おお</sup>急<sup>いそ</sup>ぎで路<sup>みち</sup>をやつて来るのです。それも何だかみちから外<sup>そ</sup>れて私どもの林へやって来るらしいのです。  
さあ、私どもはもう息<sup>いき</sup>もつまるように思いました。ずんずん近づいて来たのです。

「この林だろう。たしかにこれだな。」

一人の顔の赤い体格のいい紺の詰えりを着たほうの役人が云いました。

「うん、そうだ。間違いないよ。」も一人の黒い服の役人が答えました。さあ、もう私たちはきつと殺されるにちがいないと思いましたが。まさかこんな林には気も付かずに通り過ぎるだろうと思つていたら二人の役人がどこかで番をして見ていたのです。万一殺されないにしてももう縛られると私どもは覚悟しました。慶次郎の顔を見ましたらやっぱりまっ青で唇まで乾いて白くなつていました。私は役人に縛られたときとつた葶苈を持たせられて町を歩きたくないと考えました。そこでそつと慶次郎に云いました。

「縛られるよ。きつと縛られる。きのこをすてよう。きのこをさ  
」

慶次郎はなんにも云わないでだまつてきのこをはきごのまま棄  
てました。私も籠かごのひもからそつと手をはなしました。ところが  
二人の役人はべつに私どもをつかまえに来たのでもないようでし  
た。

うろうろ木の高いところを見ていましたしそれに林の前でぴた  
つと立ちどまつたらしいのでした。そしてしばらく何かしていま  
した。私は萱はの葉はの混こんだ所ところから無理むりにのぞいて見ましたら二人  
ともメリケン粉こふくろの袋ふくろのようなものを小わきにかかえてその口の結むす  
び目を立たつたまま解といているのでした。

「この辺へんでよかろうな。」一人が云いいました。

「うん、いいだろう。」も一人が答こたえたと思うとバラツバラツと音がしました。たしかに何か撒まいたのです。私は何を撒まいたか見たくて命いのちもいらないうちに思おもいました。こわいことはやつぱりこわかつたのですけれども。

役人どもはだんだん向うの方へはんの木の間を歩きながらずいぶんしばらく撒まいていましたが俄にわかに一人が云いいました。

「おい、失しつぱい敗ぱいだよ。失しつぱい敗ぱいだ。ひどくしくじった。君きみの袋ふくろにはまだ沢たくさん山さんあるか。」

「どうして？ 林はやしがちがったかい。」も一人おひとりが愕おどろいてたずねました。

「だって君、これは何という木かしらんが、栗くりの木じゃないぜ、  
途方とほうもないとこに栗みの実みが落ちおちてちや、ばれるよ。」

も一人が落ちついた声で答えました。

「ふん、そんなことは心配しんぱいないよ、はじめから僕ぼくは気がついて  
るんだ。そんなことまで何のかんの云うもんか。どっから来たろ  
うって云ったら風で飛ばとされて参まいりましたでしょうって云やいや  
。」

「そんなわけにも行くまいぜ。困こまったな、どこか栗くりの木の下でま  
こう。あ、うまい、こいつはうまい。栗くりの木だ。こいつから落ち  
たということにすりやいいな。ああ助たすかった。おい、ここへ沢山  
まいておこう。」

「もちろんだよ。」

それからばらつばらつと栗の実が栗の木の幹みきにぶつつかつたりはね落ちたりする音がしばらくしました。わたくし私どもは思わず顔を見合せました。もう大丈夫だいじょうぶ役人やくにんどもは私たちを殺ころしに来たのでもなく、私どもの居いることさえも知らないことがわかったのです。まるで世界せかいが明るくなつたように思いました。

遁にげるならいまのうちだと私たちは二人一いっしょ緒しよに思つたのです。その証しょうこ拠こには私たちは一寸ちよつと眼めを見合せましたらもう立ちあがつていました。それからそおつと萱かやをわけて林のうしろの方へ出ようとなりました。すると早くも役人やくにんの一人が叫さけんだのです。「誰だれか居いるぞ。入るなつて云つたのに。」

「誰だ。」も一人が叫びました。私たちはすっかり失策しくじってしまつたのです。ほんとうにばかなことをしたと私どもは思いました。役人はもうがさがさと向うむこの萱かやの中から出て来ました。そのとき林の中は黄金きんいろの日光で点々になつていました。

「おい、誰だだれ、お前たちはどこから入つて来た。」紺服こんふくのほうの人が私わたくしどもに云いいました。

私どもははじめまるで死しんだようになっていましたが大だんだん近ちかくなつて見ますとその役人の顔はまっ赤かでまるで湯気ゆげが出るばかり殊ことに鼻はなからはぶつぶつ油あぶら汗あせが出ていましたので何だか急きゆうにこわくなくなりました。

「あつちからです。」私はみちの方を指さしました。するとその役

人はまじめな風で云いました。

「ああ、あつちにもみちがあるのか。そつちへも制札せいさつをしておかなかつたのは失敗しつぱいだった。ねえ、君きみ。」と云いながらあとからしなびたメリケン粉こふくろの袋をかついで来た黒服に云いました。

「うん、やっぱり子供こどもらは入つてるねえ、しかし構かまわんさ。この林からさえ追い出しとけあいんだ。おい。お前たちね、今日はここへ非ひ常じょうなえらいお方が入いらつしやるんだから此処ここに居いてはいけないよ。野原に居たかつたら居てもいいからずうつと向うの方へ行つてしまつてここから見えないようにするんだぞ。声をたててもいけないぞ。」

私たちは顔を見合せました。そしてだまつて籠かごを提さげて向うへ

行こうとしました。

慶次郎けいじろうがぼいっとおじぎをしましたから私わたくしもしました。紺服の役人はメリケン粉のからふくろを手に団子だんごのように捲まきつけていました。が少し屈かがむようにしました。

私たちは行こうとしました。すると黒服の役人がうしろからいきなり云いました。

「おいおい。おまえたちはここでその蕈きのこをとったのか。」

またかと私はぎくつとしました。けれどもこの時もどうしても「いいえ。」と云えませんでした。慶次郎がかすれたような声で「はあ。」と答えたのです。すると役人は二人とも近くへ来て籠の中をのぞきました。

「まだあるだろうな。どこかここらで、沢山たくさんある所をさがしてくれないか。ごほうびをあげるから。」

私たちはすっかり面白おもしろくなりました。

「まだ沢山たくさんありますよ。さがしてあげましょう。」私が云いましたら紺服こんぷくの役人やくにんがあわてて手をふって叫さけびました。

「いやいや、とつてしまつちやいけない、ただある場所ばしょをさがして教えてさえくれればいいんだ。さがしてごらん。」

私と慶次郎とはまるで電気にかかったように萱かやをわけてあるきました。そして私はすぐ初はつたけ葷ところの三つならんでる所を見附みつけました。

「ありました。」叫さけんだのです。

「そうか。」役人たちは来てのぞきました。

「何だ、ただ三つじやないか。長官ちようかんは六人もご家族かぞくをつれて

いらつしやるんだ。三つじや仕方しかたない、お一人十ずつとしても六十なくちやだめだ。」

「六十ぐらい大丈夫だいじようぶあります。」慶次郎むこが向うで袖そでで汗あせを拭ふきながら云いました。

「いや、あちこちらばったんじやさがし出せない。二とこぐらいに集あつまってなくちや。」

「初蕈いきおいはそんなに集まってないんです。」私も勢いきおいがついて言いました。

「ふうん。そんならかまわないからおまえたちのどつた蕈いしをそこ

らへ立てておこうかな。」

「それでいいさ。」黒服のほううすが薄いひげをひねりながら答えました。

「おい、お前たちの籠かごの葦をみんなよこせ。あとでごほうびはやるからな。」紺服は笑わらって云いました。私たちはだまつて籠を出したのです。二人はしやがんで籠かごを倒さかさにして数を数えてから小さいのはみんなまた籠かごに戻もどしました。

「丁度ちやうどいいよ、七十ある。こいつをこころへ立ててこう。」

紺服の人はきのこを草の間に立てようと思いましたかたむがすぐ傾かたむいてしまいました。

「ああ、萱かやで串くしにしておけばいいよ。そら、こんな工合ぐあいに。」黒

ろくく  
服はいいながら萱の穂を一寸ばかりにちぎって地面に刺してその上にきのこの脚をまつすぐに刺して立てました。

「うまい、うまい、丁度いい、おい、おまえたち、萱の穂をこれぐらいの長さにちぎってくれ。」

わたくし  
私たちはとうとう笑いました。役人も笑っていました。間もなく役人たちは私たちのやった萱の穂をすっかりその辺に植えて上にみんな蕈をつき刺しました。実に見事にはなりましたがまたおかしかつたのです。第一萱が倒れていましたしきのこのちぎれた脚も見えていました。私どもは笑って見ていますと黒服の役人がむずかしい顔をして云いました。

「さあ、お前たちもう行ってくれ、この袋はやるよ。」

「うん、そうだ、そら、ごほうびだよ。」二人はメリケン粉この袋を私たちに投げました。

そんなもの要いらないと私たちは思いましたが役人がまたまじめになって恐こわくなりましたからだまって受け取りとました。そして林を出しました。林を出るときちよつとふりかえつて見ましたら二人がまつすぐに立ってしきりにそのこしらえた蕈の公園をながめているようでしたが間もなく、

「だめだよ、きのこのほうはやっぱりだめだ。もし知れたら大へんだ。」

「うん、どうもあぶないと僕ぼくも思った。こつちは止よそう。とつてしまおう。その辺へかくしておいてあとで我われわれがとつたという

ことにしてお嬢さんじょうさんにでも上げればいいじゃないか。そのほうが安全あんぜんだよ。」というのがはつきり聞えました。私わたくしたちはまた顔を見合せました。

そして思わずふき出してしまいました。

それから一目散いちもくさんに遁にげました。

けれどももう役人やくにんは追おつて来ませんでした。その日の晩方ばんがた

おそく私たちはひどくまわりみちをしてうちへ帰りましたが東とうほう

北長官くちようかんはひるころ野原へ着ついて夕方まで家族かぞくと一緒いっしょに大へ

面白おもしろく遊あそんで帰ったということを知しりました。その次の年私つぎ

どもは町の中学校に入りましたがあの二人の役人にも時々あいました。二人はステッキをふつたり包つつみをかかえたりまた競馬けいばなど

で酔<sup>よ</sup>つて顔を赤くして叫<sup>さけ</sup>んだりしていました。私たちはちやんとおぼえていたのです。けれども向<sup>むこ</sup>うではいつも、どうも見たことのある子<sup>こども</sup>供だがい思<sup>おも</sup>い出せないというような顔をするのでした。

# 青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 二人の役人

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>